

西日本新聞
2020年
4月26日

(第3種郵便物認可)

ホスピスという言葉は、日本ではがんなどの緩和ケア施設を指すことが多い。だが「warm hospitality (温かいもてなし)」の語源通り、だれもが暮らしやすい社会の在り方と捉え、その実現をライフワークにしている。若いころから「どう生きるのか」に迷い、国内外を旅した。お金がなくなればその地で働き、次の地へと向かう。インド、パキスタン、ギリシャ、フランス、そして37歳のとき、スイスのジュネーブでホスピスを学ぶ。看護の現場を見学する中で心が定まり、帰国して40歳で看護師になった。だが実際に働いた療養型病院で違和感を抱く。酸素吸入、心臓モニター、尿管…自身の意思を聞かれることもなく、たぐさんの管を付けられた高齢患者たち。

「開かれたホスピス」実現へ活動

くま さき ゆき てる
隈崎 行輝さん(70)

—宗像市葉山



旅に学ぶもてなしの心

ホスピスについてあらためて考え、その在り方を求めてアメリカ、カナダ、オーストラリアのホスピスでボランティアも体験した。病院で、地域で、患者が望む終末期の形を探り、医療と介護がチームを組んでケア

をする。だれもが受けられるホスピスを日本でも実現しようと福岡で活動を開始した。ホスピスの全国大会を終えた直後の2002年11月、脳出血で倒れて右半身まひと失語症を患う。だが

1年後には足を引きずりながらヨーロッパへのホスピス訪問を再開。2011年からは「ホスピスをすべての人に開かれたものに!!」をスローガンに、6年かけて北海道から沖縄まで全国行脚した。署名1万799

ろいなる人が話しかけてくる。立ち話をしただけの人。本を買ってくれた。「面白そうだなだと思ってくれたのかな」。お遍路さんに慣れた四国の人々には、訪れた人をもてなす「お接待」の気持ちが根付いている。

9筆を集め、厚生労働省に提出した。2018年からは3度目の四国八十八カ所巡りに挑戦している。10日は四国を歩き、自宅にいたときはこれまでの旅を振り返り原稿を書く。ようやく一冊にまとまり昨年秋、「不思議な旅の日々」(税込み千円)を自費出版した。

「ホスピスの心に通じると思う。不自由な体で自分が歩くことで、社会がやがて変わっていくかもしれない」

倒れた後、動かなくなっていた右腕は時間をかけてだんだん上がるようになり、最近ペンを握って「隈崎」と書けるようになった。

体を傾け、足を引きずって歩く遍路姿の自分に、い

「何だか段々、若くなってきたのかも」と笑った。(今井知可子)

不思議な旅の日々

Kumasaki Yukiteru
隈崎 行輝

…神との邂逅を求め続けた旅、しかし、
神はいつも彼の傍りにいた。(石垣靖子)

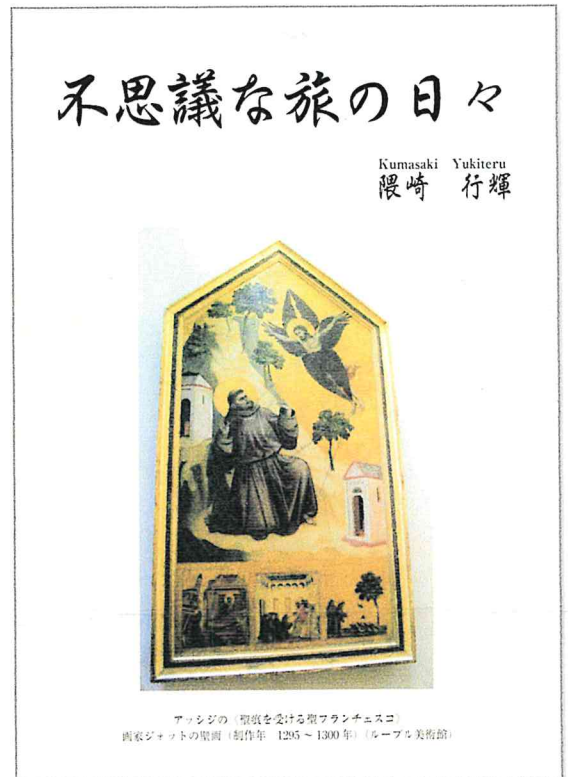
主な目次

- ・はじめに 「不思議な旅の日々」に寄り添って
(北海道医療大学名誉教授 石垣靖子)
- ・【日本編】(26歳～32歳)
- ・【アジア編】(32歳～33歳)
- ・【ヨーロッパ編】(33歳～41歳)
(その後、現在までに至る)
- ・編集をふりかえって
(ホスピス地域活動ボランティア 小山宏子・松尾多恵子)
- ・隈崎行輝 旅の道標

～Warm Hospitality

あたたかいもてなし～

(ホスピスの語源)



不思議な旅の日々

隈崎行輝 著

定価1000円(2019年7月刊)



隈崎行輝(くまさき・ゆきてる) 1949年宮崎県延岡市生まれ。26歳の頃、人生がわからなくなり旅に出る。日本とアジアとヨーロッパをあわせて10年間旅したのち、37歳のときスイスのジュネーブから日本へ帰って看護師を志す。その後、日本の医療のあり方に疑問を感じ1991年に「福岡・生と死を考える会」を立ち上げ、アメリカ、カナダ、オーストラリアへホスピスツアーを行うなど精力的に活動。1998年に会の名称を「市民ホスピス福岡」に変更。2002年、会の事務所にて脳出血にて倒れる。脳出血発症後1年後、パリ、イタリアのアッシジ、スペインを一人で旅する。右半身マヒと失語症で発語もままならないなか、再び世界各地旅をしながらリハビリを続け、2011年「ホスピスをすべての人に開かれたものに！」署名活動開始。2017年、署名17,999名分を厚生労働省に届ける。2018年より3度目の四国八十八ヶ所巡拝を始め、3年かけて巡る予定。現在も不思議な旅を続けている。他の著書に『ぼくが旅したホスピス』(2014年)

隈崎行輝ホームページ kumasaki.jimdofree.com メール yuki@k.email.ne.jp

住所 〒811-4171 福岡県宗像市葉山 2-30-6

携帯電話 090-4480-6142 (隈崎) まで本を注文してください

隈崎行輝 旅の道標

1949年 昭和24年12月 (宮崎県延岡市)に生まれる。

- ・中学校まで宮崎にいる。いじめによる嫌がらせを受ける。
- ・高校、大学は福岡へ。

1975年 26歳 仕事は少ししたけど、人生が解からなくて、26才の時、10月、旅へ出る。

- ・京都に行く。若い宮大工に会い、そこで、信州の「きょうかい」の住所を教えてもらう。
- ・栃木県の益子焼の渡辺佳春さんに出会った。
- ・27歳 四国八十八ヶ所の冬から春にかけて巡礼をした。

1976年 春から栃木県、益子の大羽庵に渡辺らさんと3ヶ月にいた。8月 槍ヶ岳から穂高に縦走する。農業大学の学生の道連れになる。(3年後に沖縄から台湾へ出て時に会う) 28歳、沖縄の与那国島にサトウキビ畑に働く。

1977年 春、東京で働こうとしたが、半年して旨くいかず死にたいと思った。秋口に東北まで歩いて岩手県の九戸郡の種市で山に入って死のうとしたが、不思議なものを見た。そこから信州の八ヶ岳のふもと「きょうかい」を訪ねた。そのきょうかいは修道院だった。そこで11日間、断食をして、半年、こころの修行をした。

1978年 29歳 その信州の教会へ、まったく偶然に栃木県の渡辺佳春さんが訪ねて来た。

- ・同じ信州の安曇野の小谷村へ、百姓で生業を立てている共働学舎に10ヶ月間お世話になった。

1980年 30歳 一度行ったことがある東京の山谷へ行って、そこで土方の仕事をした。

1981年 31歳 長野県のある人に伊那谷へは別れを言い、この時、外国へ行くことを決めた。

- ・再び与那国島へ来て、インドに行くためのパスポートを準備した。
- ・台湾へと越えた時、3年前の農業大学の学生と(今は石垣島の公務員だった)同じ船だった。

1982年 32歳 インドのカルカッタ(コルコッタ)へ行った。そして、サルナートからブッダガヤへ行った。そこで、糞雑依の坊さんに出会った。その後もネパールのポカラでも同じ坊さんに出会った。

私は17歳で骨肉腫で亡くした直野博明くんが、15年間の時を超えて彼が現れた。また、マチャプチャレに21日間のトレッキングをやった。ニューデリーでパスポートやお金などを盗まれた。

1983年 33歳 ギリシャに着いた時に、3ヶ月バイトをやった。パリにたどり着き、以前にネパールであった若いユダヤ人の家に行った。そして、レストランで働いた。オペラ座の近くにあったので、それを見たが、それがパリの『アッシジのフランソア』(小澤征爾の指揮)。

また、近くにルーブル美術館があって何十万点の絵を中から『聖痕を受ける聖フランチェスコ』(イタリアの作)が現れた。

1984年 34歳 パリを起点にフランスの地方やデンマークのコペンハーゲンやギリシャやドイツなど訪ねた。ヘルマン・ヘッセの息子のハイナー・ヘッセ氏に出会う。

1985年 35歳 イタリアのアッシジへ旅をした。その折、日航ジャンボ機の事故が報じられた。秋、スイスのジュネーブに移り住んだ。スイス人の人、パスカルと部屋のシェアを行った。その時、日本の母の死を知った。

1986年 36歳 ジュネーブでいる時、看護学校へ行くことを決め、国際赤十字本部を訪ねたり、学校を捜したり受けたりする。母親の死を知り、一度、日本に帰らなければと思い、往復切符を持って日本に帰る。一度、日本へ帰る。

帰国、兄弟、親戚とかが外国に行くことを反対し、日本で看護学校に行くことにする。

1987年～1989年 37歳から39歳 准看護学校入学。老人病院で働きながら学校へ行く。

1989年～1992年 39歳から42歳までの3年間 3年間、正看護学校入学したが、働きながら、どうしても日本の医療の問題を考え、看護学校の2年生の時、「福岡・生と死を考える会」を市民団体を創る。

1992年～1994年 42歳から44歳までの3年間 アメリカ、カナダ、オーストラリアへホスピスツアーを企画する。旅の中で岡村昭彦（国際ジャーナリスト1929～1985）の「ホスピスへの遠い道」を読む。

1996

年46歳4月より7か月半 シアトルのホスピスでボランティアとして働く。ヨーロッパ（フランス、オランダ、イギリス、アイルランド）を周った。ロンドンでは「国際ホスピス会議」があつて参加した。

1997年 47歳 帰国後、宗像保健所で1年間働く。

1998年 48歳 会の名まえを「福岡・生と死を考える会」から「市民ホスピス・福岡」（岡村昭彦の『ホスピスへの遠い道』にフランスのリヨンに出て来る『市民ホスピス』に名にちなんで変え、活動を続けた。

- ・仕事を辞め、会の活動を「市民ホスピス・福岡」これ一本にする。

- ・「日本ホスピス・在宅ケア研究会」の全国大会を福岡で平成14年9月、準備から3年間をやった。全国大会を福岡でやりました。

2002年 53歳 平成14年、11月1日、会の事務所において脳出血に倒れた。

2003年 54歳 発病後、一年で、パリ、イタリアのアッシジを一人で旅行する。しかし、右半身マヒで、失語症になって発語も出来ないまま、目的が叶わず、うまくいかなかった。

2004年 55歳 それから一年半後に、自分でリハビリをして、もう一度、パリ、イタリアのアッシジを旅した。今まで見失ってた《神》を再び知った。

2007年 57歳 発病後、4年5ヶ月で、7ヶ月間かけて、四国八十八ヶ所巡礼に行く。

2008年 58歳～59歳 一昨年と昨年 スイス、フランス、スペイン、ネパール等を旅をした。これは脳出血の頭が理解するために、過去の自分はどんな場所で生きているのか知るために。

2010年 60歳 国外旅行はリハビリに良いと思った（私はどんな状況でしゃべろうとする状況を無理にでもする）。細かなスケジュールを立てず、「ヨーロッパ」と「行きと帰り」だけ決めて、ヨーロッパを2ヶ月、それを3年間、リハビリのつもりでやった。オランダ、スイス、フランス、スペイン、イギリス、アイルランド等、お陰で、だいぶ、頭（脳出血）も状態も良くなり、多くの友人も出来た。

2012年 62歳 2年半前より、「ホスピス」は「がん」と「エイズ」だけではなく、と訴えて全国行脚をし始めた。これは5年間続けるつもり。

2015年 65歳 署名活動は現在14,576名。

2017年 67歳 6年間の17,999名の署名活動の請願を厚生労働省に東京に出しました。

2018年 4月より四国八十八ヶ所めぐりを3年間やります。